

「西田と大拙の真宗理解をめぐる」

東洋大学 竹村 牧男

西田と大拙はともに明治 3 年の生まれ、金沢第四高等中学校で一緒になり、以後、生涯変わらずに心からの交流を果たし、思想的にも相互に同じ「超個の個」の事実を見ていることを確認し合っていた。

西田の家は真宗にゆかりが深く、一方、大拙の家の宗旨は臨済宗であった。西田は青年期に東京に出て学問に励み、大拙はその後を追って東京に来るも、鎌倉・円覚寺に入り浸りとなって禅に打ち込んだ。その影響を受けて西田も参禅に打ち込むことになる。やがて大拙は、アメリカでの生活、帰国後の学習院時代を経て、京都の大谷大学に赴任する。ここで真宗に出会って、禅と真宗とが手を結びあっている地平を探究し続けることになる。大拙は禅者であるにもかかわらず、真宗への理解を深め、妙好人を発掘し、法然一親鸞に息づく「日本の靈性」を見出した。それは、「絶対無縁の大悲によって、この身このまま救われる」というものであった。

一方、西田は 30 代を中心に禅の修行に専念したものの、幼少期より真宗の宗教性の中で育ったことから、晩年にはその心根がよみがえってくる。そのきっかけとなったのは、田辺元の真宗論である。それは、道徳の立場であって宗教の立場ではないと、西田にとってけっして承服できないものであった。最晩年の論文となった「場所的論理と宗教的世界観」の根柢にあるモチーフは、実は田辺の真宗理解批判にある。西田は、真宗の救済の論理を「逆対応」によって明らかにし、しかもその論理は禅にもキリスト教にも通底することを論じた。その構造は、「仏は我々の自己に何処までも超越的なるとともに、しかもこれを包むものである」ということにある。

西田も大拙もこのように、真宗の「絶対他力」という立場をよく指摘している。しかし西田と大拙の真宗理解は、けっしてそこにとどまるものでもなかった。西田は、「逆対応」はそのまま「平常底」であるとも論じていく。たとえば西田は、「自然法爾と云ふことは、創造的でなければならない。我々の自己が創造的世界の創造的要素として、絶対現在の自己限定として働くと云ふことでなければならない」と論じる。一方、大拙は、「極楽というところは久しくとどまるべきところではない。……それだから、どうしても極楽を見たただちに戻ってこなければならない。還相の世界へはいらにゃならん」と、還相の重要性を強調した。大拙のこの還相の強調は、おそらく死後のこととして説いたものではないであろう。今・ここで、弥陀の救いに与ったら、直ちにこの世で他者に関わる活動に励むということであろう。ここにおいても、大拙と西田の真宗理解はよく照応している。

このように、西田と大拙とは、真宗に関しても、浄土往生にとらわれない、今・ここでの救いを中心とする共通の理解を有していたのである。その立場は、現代における真宗理解に、一つの実力ある道を拓くものとなるのみでなく、宗教から現実社会への通路を導くものともなるであろう。